

『サトリ』考

昔、樵某が深山に分け入り、木を伐採しておったそう。ふと横を見ると奇妙な獣がその様子を伺っておるのに気がついた。何という獣だろうと思いをめぐらしていると、

「お主儂が何という獣なのかと考えておるな」とその獣が言う。樵は驚いてその獣に見入った。すると今度は

「お主、仰天しておるな... おっ、今度はなぜ儂がしゃべれるのかと怪しんでおるな... 儂が世に言う『サトリ』じゃ」と言う。樵はこれが噂に言うサトリかと思った。風評によると滅多にお目にかかれない珍獣で、人の心を映せる能力を持ち、未だかつて生け捕りにされたことがないと聞き及んでいた。樵はこいつを生け捕りにすれば大層金儲けができると思った。するとその刹那サトリが

「お主、今金儲けをたくらみ、儂を生け捕りにしようと思ったな、浅はかな奴じゃ」と言う。樵は何を思っても見抜かれてしまうので少しく躊躇したが、お構いなく、どうすれば生け捕りにできるかの算段を始めた。素手で捕らえたいが、見たところ狸ほどの大きさのこの獣は、逃げ足は自分より速いだろうか、と考えた。

「お主、素手で儂を捕まえるつもりらしいが、儂はお主より速く動き回れるぞ」とサトリ。そこで今度は、腰の縄を用いて縛り上げるにはどうすれば良いかを考え始めた。

「無駄じゃ、お主の腰の縄は振り回すには少々短すぎる」と。樵は益々あせってしまい、ついには生け捕りにできなくとも、剥製にしてでも我がものにしようと考え始めた。伐採に使う手斧を振るって一撃を加えてやろうと思った刹那、

「お主、生け捕りをあきらめて、手斧で儂を仕留めようと思っておるな、しかしそれとて儂はたやすくかわすであろう」と心を映されてしまい、とうとうあきらめの境地に至った。

サトリは、「お主もうあきらめたのか」と問いかけてきた、しかし樵は取り合わずに黙々と自分の本来の仕事である伐採に熱中し始めた。相変わらずサトリは横で樵のすることを眺めていたが、樵の心に何の思いも無いので、サトリの方も語ることがないまましばらくの時が経った。とその時、不意に樵の振っていた手斧が柄から抜け、たまたまサトリの方に飛んで、その脳天を真二つに打ち割っていた。

これは千葉周作の「剣術名人の位」(『剣法秘訣』所収)にある寓話を私が脚色したものである。「悟りを開く」とはよく言われることだが、悟りをひらいたと自負していた『サトリ』が樵の無念無想・明鏡止水の境地から出た一撃に破れる。剣の修行の奥深いところを考えさせるものである。

柳生新陰流の極意は「活人剣・転」にあると言われる。相手の好むところに相手を働かせて勝をおさめるといのもので、高度な心的位である。小野派一刀流における独妙剣などもこの境地を説いているのだと推察する。

能役者世阿弥は風姿花伝において「秘すれば花なり。秘せずば花なるべからず」と説いている。「たとえば弓矢の道の手だてにも、名将の案ばかりひにて、思いのほかなる手だてにて、強敵に勝つことあり。これ、負くる方のためには、珍しき理に化かされて、破らるるにあらずや。これ一切の事、諸道芸において、勝負に勝なり」と記している。しかしこの思いもよらない手段も、事前に相手に悟られては元も子もない。やはり秘すべきものなのである。しかし剣を交えるとこれを秘すことが難しく、至難の事なのである。我が思いはとかく色に出てしまう。

柳生新陰流ではこれらの思いを「病氣」と称している。勝ってやろう、技を使ってやろう、裏をかいてやろう等という思いはすべて「病氣」と説く。さらにその心の「病氣」を取り去ろう、思わずにおこう、無念無想の境地に至ろうと思う、その気持ちさえも「病氣」とであると説く。柳生十兵衛三厳は「去る心をも忘れよ」と著作『月之抄』で記している。これほどまでに自分を昇華させないと「活人剣・転」の極意には至らないと言うのである。多くの剣客がその境地を単に剣の修行だけでなく、神仏や禅に求めたのも頷けるのである。

ところでキリスト教がもっと早く日本に伝導され、広く普及していたならば、多くの剣道家が信仰を持っただろうと言われている。小野派一刀流の笹森 建美宗家の講話にも言及されているが、高山右近、小西行長なども信仰を受け入れ、また山鹿素行の子孫からはクリスチャンホームが起こされただけでなく、牧師となられた方もいるとのことである。聖書の「一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの実を結ぶべし。己が生命を愛する者は、これを失ひ、この世にてその生命を憎む者は、之を保ちて永遠のいのちに至るべし」(ヨハネによる福音書12章24～25節)というような聖句は、大いに剣道家の琴線に触れたであろう事は容易に推測できる。

さて話を起承転結の結にもって行かねばならない。上記の笹森先生は「憐れみとは、愛と同情が一つになったもので、相手の気持ちを、自分の気持ちにすることです。剣の修行をする者も、激しさ、荒々しさを越えて、柔らかく、円く、穏やかに、相手の立場を考えられる者が、自己に勝ち、悪に勝ち、人を殺す剣を、人を生かす剣に変えられると教えられます」と述べられている。新渡戸 稲造は著書「武士道」の中で、「礼は寛容であって人の利をはかる。礼は妬まず、誇らず、たかぶらず、非礼を行わず、自分の利益を求めず、軽々しく怒ら

ず、人の悪を思わない」と述べている。これは言うまでもなく、聖書の有名な一節を、聖句では「愛」となっているところを「礼」に置き換えたものである。

話を『サトリ』にもどそう。上述の『サトリ』は自らサトリと名乗り、悟りを開いたと自負していた。しかし本当に突き詰めたところ真に悟っていたのだろうか。その登場来サトリの樵に対する対応には「礼・憐れみ・愛」が欠落しているように思える。従って樵に対立の感情を芽生えさせ、結局のところ無念無想の一撃を受けることとなる。自分は悟りを開いているという「^{おご}驕り」が命を落とす遠因となっているのである。

居合には「^{きや}鞘の内」という教えがある。いくつもの教えを含んでいると思われるが、その一つの解釈は「刀を抜かずに済むものならば、抜かぬが良い」との教えだ。「争わずに済むものなれば、争いは避けよ。争わぬが極意なり」との教えである。そして争わぬためには「礼・憐れみ・愛」が絶対不可欠となる。

なぜ剣道をしているのか、とよく聞かれる。一番の楽しみは稽古を頂戴する方との竹刀を交えての対話である。その対話を通して、真の悟りを得られれば良いのと思う。それは至難の事ではあるが、その^{りてい}里程は苦痛ではなく、むしろ楽しいものなのである。打たれるたびに自分の未熟さを思いつつ、本当の意味で強く、つまり「礼・憐れみ・愛」を兼ね備えた者になりたいものだ。